

キナ樹皮渡来の伝説をめぐって、

チンチヨン伯爵夫人説とイエズス会説

泉 彪之助

新大陸からヨーロッパへキナ樹皮の渡来について、次のような説（以下キナ伝説）がある。スペインのチンチヨン（Chinchon）伯爵夫人が、夫が副王の地位にあったペルーで三日熱にかかった。これが先住民が使っていたキナ樹皮で完治したので、キナ樹皮をヨーロッパに持ち帰って紹介し普及させたという。このことから、リンネはキナ樹を *Cinchona* と命名した。しかし現在は、この説は史実としては否定されている。とくにウエルカム医事博物館のハギス（Haggis, A. W.）は、この説を検討し伝説に過ぎないことを示した。⁽¹⁾ ハギスの論文は詳細綿密なもので、この見解は一般に支持されていると考えられる。

一方で、イエズス会士によってキナ樹皮が渡来、普及したとの説も有力である。

著者はこれらの説に関心を持ち、一般史的背景をしらべるとともに、チンチヨン伯爵夫人に関するキナ伝説が成立し否定された経過を検討した。チンチヨンという土地については、別稿で報告した。⁽²⁾

一、通説とその否定

前記の通説について、成書に次のような記述がある。

「チンチヨンの町は二つのことでヨーロッパ中に知られている。

ひとつは一七世紀のチンチヨン伯爵夫人アナ・デ・オソリオが、当時ヨーロッパでは知られていなかったキナを夫の住むペルーから輸入して下熱の特効薬として紹介し、これが後年スウェーデンの植物学者リンネによってチンチヨーナと命名されたこと。ちなみに英語はCinchona、キニーネというのはオランダ語からきている」(注一)⁽³⁾

「一七世紀にはペルーから驚異的な薬キナ皮が輸入された。キナ皮はペルーの現地人が薬用に使用していたが、一六三八年、ペルーの総督シンコン Count Chinchon 伯爵夫人がリマでマリア熱にかかったときキナ皮を服用して全快した。そこで一六四〇年、その侍医ジュアン・デル・ベゴ Juan Del Vega がスペインへ持ち帰り、『伯爵夫人散薬』の名でヨーロッパで用いられるようになった。(中略)キナ皮は尿、汗あるいは咯痰によって病毒を排泄しないで素晴らしい下熱作用を現わす。これは従来の液体病理説では考えられないことで、その原理をおびやかすもの(以下略)」

「キナノキは、一六三八年頃、ペルー総督チンチヨーン (Chinchon) 伯爵夫人の激しい間欠熱に使われて、その病気を治したので、ヨーロッパへ持って来られた。このキナノキの薬効は、たちまち、賞賛を博することになり、数年もたたないうちにヨーロッパ全土で用いられるようになった。

この薬品は、キリスト教の一派のイエズス会の会員が、大部分を配布したので、これを『イエズス樹皮』もしくは『イエズス散』、『枢機卿散』、『教父散』などと称されるようになった。また、これは、伯爵夫人散、ペルー皮、ペルー散、熱皮、赤皮、黄皮とも、また、そのほか、語源の類似した名称で呼ばれた」⁽⁵⁾

「彼(第四代チンチヨン伯爵ルイス・ヘロニモ・フェルナンデス)の二番目の夫人ドニャ・フランシスカ・エンリケス・デ・リベラは、インディオがマリアアの薬としてもちいていたキナを、一六三二年にスペインに紹介し、その普及に貢献し、さらにヨーロッパにも紹介し普及させたことによって、伯爵よりも有名になった。彼女の名誉のためにキナはチンチヨ

ーナ『chinchona』と名付けられた」(泉訳) (注二)⁽⁶⁾

これにたいし、通説を否定する次のような記載がある（原著論文は別記）。

「キナの樹の学名はリンネの二つの誤りにもとづいて付けられた。この誤りはキナ樹発見の直後に根拠のない伝説が生まれたことを思えば許されることであろう。リンネは幻想的な偽りの伝説を真に受けて、その樹にキンコーナと名付けたのである。これは当時ペルーの総督としてスペイン王の代理をしていたキンコン伯爵の夫人フランチェスカ・ド・リベラに敬意を表して名付けられたのであった。

キンコン伯爵夫人はキナ皮によってマラリアから救われた。そこで伯爵夫人はこの薬を非常にお気に召され、貧しい人々にこれをあたえられたので、この薬は「伯爵夫人の散薬」と呼ばれるようになった。しかも伯爵夫人はこれをヨーロッパにもって行き、疫病の治療薬として紹介した。この伝説をリンネは実際にあつたことだと思つたのである。もっとも、その後三世紀近くのあいだ一般にそのように「思われていた」のであつた。今日では、この美しいフィクシオンが全くの噂に過ぎなかつたという事は、よく知られている。この植物学の偉大な父はもちろん当時このことを知らなかつたので、キンコーナがキナのラテン名となつたのである」⁽⁷⁾

「ヨーロッパへのキナの紹介について、一般には伝説的な見方が流布している。一六三〇年に、ペルー・ロハの代官が、インディオの首長と、後にチンチョン伯爵夫人のおかげで病気がなおり、それから植物学上の種の *Cinchona* という名前ができたなど。これらの説の多くは、ラストレス (Lastres)、ハラミジヨ (Jaramillo)、エルナンド (Hernando)、ゲラ (Guerra) による史料の検討で否定された。ここでは、キナ皮が南アメリカから来、セビリヤを通じてヨーロッパに入り、イエズス会士によって（キナ皮は、イエズス会士の散薬 (pulvis iesuitarum) あるいは神父の散薬 (pulvis patrum) と呼ばれた）普及したことを認めるのに合意しよう。ルゴ (Lugo) 枢機卿の仲介で、キナでルイ一四世の熱病が治ったとき（枢機卿の散薬 (polvos del Cardenal)）、キナの社会的名声は頂点に達したが、二つのグループ、新しい事実⁽⁸⁾に動転させられたガレノス派、イエズス会士がキナ普及に役割を果たしたことに反感を持つプロテスタント、がこれに反対した。しかしすぐ明ら

かになるように、キナはその時代の薬学の議論の中心的テーマとなった⁽⁸⁾（泉沢）（注3）
これらの記載から、チンチョン伯爵夫人の貢献は広く流布しているが、伝説であることが定説となつていると認められよう。

二、伝説の内容と異説・史実

文献ではいろいろな訳されているが、チンチョン伯爵の正式の職名はペルー副王である。次項でのべるように、ペルー副王は国家元首に準ずる高い地位で、その夫人が関係したということが人々の想像をかきたてたのであろう。キナ伝説は、種々の文学的修飾を受けたようである。主な異説と史実をまとめると、次のようになる。

ヨーロッパへキナが渡来した年代は、多数の説があるが一七世紀前半、一六〇〇年代から一六三〇年代であるらしい。

(一) チンチョン伯爵夫人の関与

伝説に共通しているのは、チンチョン伯爵がペルー副王の職にあつたとき、伯爵夫人がペルーで三日熱に罹患し、それがキナ樹皮で軽快したため、ヨーロッパへ伝えられたという点である。

伯爵夫人がキナの効力を知った過程もいろいろいわれ、ある説では、夫人がマラリアで病床に伏していたとき、副王家につとめていたインディオの少女がキナの効力を知らせたという⁽⁹⁾。

伯爵夫人がキナを人々に与えたのは、ペルーという説と、スペインに帰国後、領地チンチョンの貧しい人たちにキナを分けたという説とある。また別の説では、夫人がキナをアルカラ・デ・エナレス大学（マドリッド大学の前身）に送り、それで著名な神学者が治療されたという⁽¹⁾。

(二) 侍医の役割

チンチョン伯爵夫人自身がキナをヨーロッパにもち帰つたのでなく、伯爵あるいは伯爵夫人の侍医(Juan del Vega)また⁽⁴⁾

は Dr. Juan de Vega (ホアン・デ・ベガ)⁽¹⁾ であるといい、またホアン・デ・ベガは、スペインに樹皮をもち帰り、セビリアで一ポンド一〇〇レアルで売ったともいう⁽¹⁾。

(三) ロハの代官 (el corregidor de Loja #または Loxa)

チンチョン伯爵にキナのことを知らせた人として、上の名前がある⁽¹⁾⁽⁸⁾。代官は、副王・総督・代官という職階制の中の職で、一般の住民が直接接した役人である⁽¹⁾。ロハは、現在のエクアドルにある。

(四) イエズス会士の役割

チンチョン伯爵夫人と共に伝説に出てくるのが、イエズス会士である。

イエズス会士の場合、修道士バルトロメ・タフル (Fr. Bartholome Tafur) アロンソ・メヒア・ベネガス (Alonso Mexia Venegas) 、ホアン・ロペス (Juan Lopez) などの名前がある⁽¹⁾⁽⁹⁾。

インディオが寒いときふるえをとめるのにキナを用いているのを、イエズス会士が見て熱に試みたという説もある⁽⁹⁾。

(四) ルゴ枢機卿 (Juan Cardenal de Lugo)

ルゴ枢機卿という名が、いくつかの文献に出てくる。ルゴ枢機卿の紹介でルイ一四世のマラリアがなおった⁽⁸⁾、イエズス会士によってローマに持ち込まれたキナがルゴ枢機卿によって受領された⁽¹⁾、ローマでルゴ枢機卿の指導でキナが頒布された⁽⁹⁾などである。

スペインの医学史家ゲラ (Guerra, F.) は、ルゴ枢機卿 (二五八三—一六六〇) の経歴をのべている。ホアン・デ・ルゴ (Juan de Lugo) は、マドリッドの貴族の家に生まれ、サラマンカ大学で法律を学び、サラマンカで兄に従ってイエズス会に入会した。故国で哲学を教えていたが、一六二二年にローマのグレゴリアン大学の教授に任命された。一六四三年に教皇ウルバン八世に任せ、枢機卿となった。イエズス会士のアロンソ・メヒア・ベネガス (一六三二年) あるいはバルトロメ・タフル (一六四五年) がペルーからの使節の一員としてローマにきたとき、キナを受け取ったという⁽⁹⁾。ルゴ枢

機卿は著名な神学者として知られ、その墓は、遺言によってイエズス会創設者イグナチオ・デ・ロヨラの墓の近くにある。⁽⁷⁾

(五) キナの異名

前述の伝説から、いろいろな異名がつけられている。

伯爵夫人の散葉あるいは伯爵夫人散、イエズス会士の散葉あるいはイエズス散 (ラ) pulvis iesuitarum)、イエズス樹皮、神父の散葉あるいは神父散 (ラ) pulvis patrum)、枢機卿の散葉あるいは枢機卿散 (ス) los polvos del Cardenal)、ペルー皮、ペルー散、熱皮、赤皮、黄皮。⁽⁴⁾⁽⁵⁾⁽⁷⁾⁽⁸⁾ やや後の時期になると、英国の医師名からタルポー散という異名もある。⁽⁷⁾

三、スペインの新大陸植民地経営と副王職

一四九二年、コロンブスは、イスラム・スペイン最後の王国グラナダ王国を滅ぼしてレコンキスタを完成したばかりのスペイン王カトリック両王から、西方航路出帆の許可と援助を得て航海に乗り出した。出帆に先立ってコロンブスは、新大陸に到達したときの利権を確保するため、両王との間にサンタ・フェの協約を結んだ。この協約には、副王という名称と地域支配権を含む種々の特権が保証されており、もしこの協約が履行されれば、新大陸の一部が実質的にコロンブスの私領となる可能性があった。しかし新大陸到達後も、コロンブスの側の失態もあって約束は守られず、コロンブスは失意の中に世を去り、新大陸は純粹にスペイン王国の植民地として統治されることになった。⁽¹⁰⁾⁽¹¹⁾

一方、東方航路開拓に熱心であつたポルトガルは西方航路にも関心を持ち、スペインと利害が衝突した。この摩擦を調整するため、一四九四年、両国間にトルデシリアス条約が結ばれ、この条約の結果、後に現在のブラジルがポルトガルの勢力範囲にはいつた。⁽¹⁰⁾⁽¹¹⁾

海をわたつたスペイン人は、残虐な方法で先住民を弾圧し権力を確立した。メキシコで栄えたアステカ王国、ペルーで栄えたインカ帝国もこのようにしてほろぼされた。征服者たちは、その実績を認められて植民地の支配機構に組み込

またが、征服が一段落すると、新大陸は植民地としての行政機構を整備し、征服者たちに代わってスペイン王国が支配権を独占した。その範囲は、北アメリカ南部と、ブラジルを除く南アメリカ大陸の主要部分を含んだ。⁽¹⁰⁾

スペイン本国には、新大陸との通商を管轄するセビリア通商院、新大陸植民地を統括するインディアス(スペインの新大陸植民地の公式名)枢機会議が設けられた。一方、新大陸植民地に最初は総督という職が設けられたが、後に広大な新大陸植民地を支配する国王代理職として副王(ス) Virrey、(英) Viceroy。副王夫人は(ス) Virreina、(英) Vicereine)制が確立し、長く続いた。⁽¹⁰⁾ (注4)

新大陸植民地は北部とパナマ以南の二つに分けられ、それぞれを統轄する職として、メキシコにヌエバ・エスパーニャ副王が、ペルーにペルー副王、別名ヌエバ・カステイリア副王がおかれた。ペルー副王庁はリマにあった。ペルー副王領はあまりに広大であったので、後にヌエバ・グラナダ、ラ・プラタの二副王領が設けられ、三つに分割された。⁽¹⁰⁾

「副王は植民地における最高の責任者として、行政、司法、軍事、財政、教会を監督する五つの大権を委任されていた」⁽¹⁰⁾

「副王は文字通りスペイン王を代表するものであり、リマ、メキシコ市など植民地の首府の壮麗な宮廷に住み、大勢の廷臣にかしずかれ、非常に高禄をはみ、植民地のあらゆる問題を司ることになった。(中略)スペインの名門中の名門からえらばれたこれらの副王」⁽¹²⁾

「あとの二つの王国、すなわちヘインディアスのヌエバ・エスパーニャ(メキシコ)とペルーに関しては、カステイリアの中央政府では、どうしても監督が行き届かなかつた。したがってここでは副王が、スペイン王自身とおさおさ劣らぬほどの実権を握ることになった」⁽¹³⁾

新大陸から人員と財宝の収奪が行われたが、またタバコ・トマト・馬鈴薯などの栽培作物、コカ・グアヤク・吐根などの薬物がヨーロッパに伝えられた。先にのべたように、キナ渡来は一七世紀に行われたとされる。

新大陸からの物資をのせた船は、セビリアおよびカディスに寄港した。とくにセビリアは新大陸貿易の中心地

であつた。⁽¹⁰⁾ライン・エントラルゴが「キナがセベリアを通つて輸入された」というのは、このことを意味する。ヨーロッパの覇権を争い、トルコの侵略に抵抗して戦争に明け暮れた当時のスペイン王国は、戦費のためヨーロッパ諸地方に多額の借財があり、新大陸から将来された財宝も、大部分は借財の返済に他国に送られた。⁽¹⁰⁾⁽¹¹⁾⁽¹⁴⁾栽培作物や薬物も、その一部となつたり、あるいは同じ経路で他国へ伝えられたのではないかと思われる。

四、イエズス会の歴史と新大陸における活動

キナ渡来の説では、チンチョン伯爵夫人とならんで、イエズス会の名があげられる。ここでイエズス会の歴史をのべる。

イエズス会の創設者イグナチオ（イグナチウス）・デ・ロヨラは、一四九一年、スペイン北東部、バスク地方のロヨラ城主の子として生まれた。騎士として出陣したフランスとの戦いで重傷を負つたイグナチオは、療養中に回心を体験し、宗教生活に入った。一五三四年、パリのモンマルトルの丘で、イグナチオら六人の同志はキリストへの奉仕を誓つた。これがイエズス会のはじまりである。一五三七年、イタリアのピチェンツァで同志と今後の方針を検討し、このときからイエズス会の名称が使用された。一五四〇年三月、ポルトガル王国ジョアン三世の要請によつて、同志のシモン・ロドリゲスとフランシスコ・ザビエルがポルトガル領ゴアに派遣されることになつた。その後、ザビエルがゴアからマラッカを経て鹿児島田之浦海岸に上陸し、日本布教に尽くしたことは知られる通りである。⁽¹⁵⁾

同年九月二七日、教皇パウロ三世はイエズス会を正式に修道会として認可した。一五四一年、イグナチオが初代イエズス会総長に就任、一五四四年、ローマにイエズス会本部設立、一五五八年、イエズス会会憲が教皇より認可された。⁽¹⁵⁾イエズス会は、マルチン・ルターなど宗教改革の開始と発展に対し、カトリック教会内における改革によつて対抗しようとした、いわゆる対抗宗教改革 (counterreformation) を目的として設立されたものであり、服従、貧困、独身を

三大綱領とした。⁽¹⁵⁾⁽¹⁶⁾

新大陸の征服に、カトリック教会は大きく貢献した。先のトルデシリアス条約によって、スペイン国王、ポルトガル国王は新大陸の領有権を認められたが、同時にローマ教皇にたいして、先住民をキリスト教徒に改宗する義務を負った。伝道師たちは次々と新大陸にわたって布教につとめたが、その多くはさまざまな修道会(ドミニコ会、フランシスコ会、アウグステイヌス会、イエズス会)に属するものであった。⁽¹⁰⁾

イエズス会は他の修道会から遅れて、一五四九年にブラジルにおける活動を開始し、一六世紀後半にスペイン領へ進出した。教育活動を重視するイエズス会は、とくに新大陸植民地における教育の普及発展に貢献した。イエズス会はまたしばしば一種のコロニー、教化集落を作り、ときには奴隷狩りにくる征服者たちから先住民を守った。⁽¹⁰⁾

イエズス会それ自身はヨーロッパ各地で政治に関与し、権謀術策にもまぎこまれるようになって、種々の摩擦を引き起こした。⁽¹⁶⁾このため、植民地統治機構の再編成にとりくんだスペイン王カルロス三世は、王権の強化をめざして、一七六七年にスペインおよびすべての海外領土からイエズス会士を追放した。⁽¹⁰⁾イエズス会が開拓に大きな功績を残したブラジルでも、イエズス会は王権と対立し、ポルトガルの国王補佐役ポンパル侯爵は一七五九年にイエズス会をポルトガルとブラジルから追放した。⁽¹⁰⁾これらによってイエズス会の新大陸植民地での活動は終了した。

ゲラによれば、一七世紀、イエズス会はペルーの *cinchona* 成育地域に近いところに伝道開拓地をもち、新大陸、スペインの両方の港に貿易のための施設をもっていたという。⁽⁹⁾

五、キナ伝説の成立とその否定

ライン・エントラルゴは、通説を否定した業績としてハギスの名をあげず、スペインあるいは南米の学者の四名をあげている。⁽⁸⁾著者は、ゲラの英文論文を除き、これらの著者の原著論文に接することができなかった。ゲラ自身も、*cinchona*

について多くの記載を引用し、スペイン語文献をあげているが、これらを手でできなかった。その点、考察は限られたものになるが、ハギスとゲラの論文を中心にキナ伝説成立と否定の経過を述べたい。

ハギスによれば、キナ伝説成立の根拠となったのは、一六六三年のセバスチアノ・バド (Sebastiano Bado)⁽¹⁷⁾ あるいは Sebastianus Baldus のちに Badus⁽¹⁸⁾ による記述である。ジャーク (Jarcho, S.) によれば、バドはジェノヴァのパンマトネ (Pannatone) 病院の医師で、この病院でキナの効力を実験し、その経験を二六五六年に出版された著書『Cortex Peruviae redivivus profigator februm』[The Peruvian bark, destroyer of fevers, revived] のべると共に、一六六三年に “Anastasis corticis Peruviae” [Resurrection of the bark of Peru] で続報した⁽¹⁸⁾。バドは、チンチョン伯爵夫人についての事実を、ペルーに長く住んだイタリア商人アントニオ・ボロ (Antonio Bollo または Antonius Bollus) からの手紙によって得たとした⁽¹⁹⁾。この手紙は、ハギスが原文ラテン語を、⁽¹⁾ハギスとゲラがそれぞれの自訳英訳を引用掲載している⁽¹⁹⁾。その概要は、次の通りである。

〔今一六六三年〕から、三、四〇年ほど前、ペルーの首都リマで、副王チンチョン伯爵の夫人が三日熱にかかった。うわさは町中にひろがり、ロハまでもとどいた。ロハの役所をあずかっていた一人のスペイン人がこのことを知り、副王に手紙で『この病気に確実に効く薬を持っている』と知らせた。

副王夫人が薬を飲むことを承知したので、副王はこの男を呼び寄せ、男は手紙に書いたことを確言した。副王夫人が薬を飲むと、皆が驚いたことにすぐ病気がなおった。

このことがリマの町に知れると、人々は副王夫人のところに押し寄せ、たびたびこの病気に悩まされる自分たちにもこの薬を使わせてほしいと願った。伯爵夫人は承知して、たくさん量の樹皮を自分のところに送らせただけでなく、病に苦しむ人たちに自分の手からも薬を与えた。このようにして薬を投与された人びとは、神のご加護で副王夫人同様

に全快した。この樹皮は後に『伯爵夫人の散薬』(スペイン語で los polvos de la Condega) と呼ばれるようになった^(注5)

ハギスは、バドがいう手紙の現物も写しも存在せず、ここに書かれた事実を記載した同時代の記録者もないのに、この伝説は一般に受け入れられたとして⁽¹⁾いる。

別稿にのべたように、ペルー副王となったチンチョン伯爵は、第四代チンチョン伯ルイス・ヘロニモ・フェルナンデス (don Luis Jerónimo Fernández de Cabrera y Bobadilla) (ハギスは、Geronimo と綴る) (一五八六—一六四七) で、その夫人がキナ伝説の主人公である。ルイス・ヘロニモ・フェルナンデスは、一六二八年から一六三九年までペルー副王の地位にあつた⁽¹⁾⁽²⁾。

キナを求めて一八五九年に南アメリカへ送られたイギリス探検隊の隊長マークカム (Markham, Clements R.) は、チンチョン伯爵の家系を調べ、アストルガ (Astorga) 侯爵令嬢で、ルイス・ヘロニモ・フェルナンデスの最初の夫人となつたアナ・デ・オソリーオ (doña Ana de Osorio) を、キナ伝説の主人公とした⁽¹⁹⁾。『ブルーガイド・ワールド スペイン』がアナを主人公としたのは、この説に従つて⁽²⁰⁾いる。しかしアナ・デ・オソリーオは、夫の副王就任以前の⁽²¹⁾一六二五年に死去しており、ペルーに在住したことはありえない。そのため、一六二八年に結婚した夫人、フランシスカ・エンリケス・デ・リベラ (doña Francisca Enriquez de Rivera) (ハギスは Henriquez と綴る) がキナ伝説の主人公とされることになった⁽¹⁾。

キナ伝説の正否が一次史料の上で検討できるようになったのは、一九三〇年、新大陸の史料を集めたセビリアのインディアス文書館で、ライト (Wright, I.A.) がペルー副王としてのチンチョン伯爵の公用日記を発見してからである⁽¹⁾。この日記は、副王秘書官スワルド (Dr. Don Antonio Suardo) が記録したもので、副王と副王夫人の病氣も詳しくかかれていた。それによると、副王自身は副王職にあつたほとんど全期間、マラリアの発作に悩まされているが、副王夫人にはそうした記載が見られない。また副王夫人の病氣がキナによって全快したとの記述もなかった⁽²⁰⁾。

上の引用のようにバドは、チンチョン伯爵夫人のスペインへの帰還についてなにも書いていないが、マークカムは、「チ

ンチョン伯爵夫人が、夫の領地の病人にキナ樹皮を与えた」としている⁽¹⁹⁾。しかしフランシスカ・エンリケスは、スペインへ帰国する途上、一六四一年一月にコロンビアのカルタヘナで病死し、ついにヨーロッパへ帰ることはなかった⁽¹⁾。

ハギスは、ンチョン伯爵夫人の侍医ホアン・デ・ベガは生涯新大陸で教職にあり、ヨーロッパへ帰らなかったため、彼の関与も伝説に過ぎないとしている⁽¹⁾が、ゲラはハギスの業績を評価しながらも、ホアン・デ・ベガがヨーロッパへ帰らなかったとするのは誤りであるという⁽⁹⁾。またゲラは、マドリッドのンチョン伯爵の屋敷でキナの効力が試みられたという記載を引用している⁽⁹⁾。

先きのべたように、キナ伝説には多数の異説がある。そのひとつひとつを検証するのは、ハギスやゲラの論文の内容を繰り返すだけになって意味がないと思われるので、ハギスの結論のキナ伝説に関する部分を引用したい⁽¹⁾。

(一) ンチョン伯爵の最初の夫人アナ・デ・オソリーオは、夫のペルー副王任命前に死去した。任地ペルーへ同行したのは、次の夫人フランシスカ・エンリケス・デ・リベラである。

(二) ンチョン伯爵の公用日記に伯爵夫人の薬あるいは重い病気の記載がないことは、伯爵夫人のシンコーナによる治癒というロマンチックな物語が、伝説以上のものではないことを強く示唆している。

(三) 伯爵夫人は、ヨーロッパへは帰ることなく、一六四一年一月一四日にコロンビアのカルタヘナで死去した。したがって薬をヨーロッパへもち帰ることはできなかったし、故国の貧しいひとたちに薬を分け与えることもできなかった。

(四) ヨーロッパへキナを紹介したとされる次の人々も、その事実はない。

医師ホアン・デ・ベガ

修道士バルトロメ・タフル

(以下略) (注6)

六、キナ樹皮渡来とガレノス派

キナはヨーロッパで熱狂的に受け入れられたが、抵抗もあつた。ライン・エントラルゴおよび石坂は、共にガレノス派の批判をあげている。⁽⁴⁾⁽⁸⁾

ラウオールは「キナの樹皮を正規の医術に用いることについての最大の障害は、体液説や排泄説に基づいていた当時の医学の各派の説を根底からくつがえすことであつた。したがつて医師のある者は、当時の医学の原理にまっこうから対立する治療薬を用いるくらいなら、いつそ死んだ方がましだと考えたほどである。／＼キナ樹皮は、一五〇〇年もの間一糸乱れぬ支配権を持っていたガレヌス主義を、最後とするために打ち込まれた一種の楔であつた。当時の多数の医師は、ガレヌスの知らない、つまり、ガレヌスの推挙しなかつた薬品は、一つとして用いようとしなかつた」としている。⁽⁵⁾

ガレノスは小アジアのペルガモンに生まれ、ペルガモン、スミルナ、コリント、パレスチナ、アレキサンドリアで医師として成功すると共に、多くの著作を残した。彼は一、二世紀の人でありながら、その学説は中世まで医学理論の基本となつた。ガレノスは、体液説に基づきながら他の学説も取り入れた折衷派であり、治療法は体液の異常を除去する発汗、瀉血、下剤投与などの方法であつた。⁽²¹⁾

イスラム・スペインの時代、アラビア医学の紹介・伝達の間所としてスペインは重要な地位を占めたが、巨匠アビケルナを始めアラビア医学ではガレノスの学説が信奉された。⁽²¹⁾カトリック教会が強い勢力を持つスペインでは、アラビア医学、カトリック教会双方からの影響によって、ガレノスの学説が長く存続したのであろう。

ガレノスの批判者ヴェサリウスは、スペインに住んだことがある。小川鼎三『医学の歴史』は「ヴェサリウスはドイ

ツ皇帝カルル五世およびその子フィリップ二世の侍医」としており、このカルル五世は神聖ローマ皇帝カルル五世で、スペイン王としてカルロス一世の称号を持ち、初代スペイン王カトリック両王の孫である。ヴェサリウスは、一五四四年にカルル五世の侍医となった。⁽⁸⁾ カルル五世は、美食と飲酒のため痛風を病んでいたが、侍医団の忠告を聞かなかつた。⁽¹⁴⁾ フィリップ二世はスペイン王フェリペ二世で、別稿で報告したように第二代チンチョン伯爵、第三代チンチョン伯爵はフェリペ二世の宮廷に奉仕した。⁽²⁾ ヴェサリウスは一五六三年までフェリペ二世につかえ、年代から見ると、第二代チンチョン伯爵ペドロ・フェルナンデスがヴェサリウスと面識があつた可能性がある。

横道にそれるが、一五八四年一月二四日、スペインを訪れたわが天正少年使節を引見したのがフェリペ二世である。⁽²²⁾ 二日後、少年使節は完成したばかりのエル・エスコリアル宮殿に案内されたが、第三代チンチョン伯爵ディエゴ・フェルナンデスは、この宮殿の建設に重要な役割を果たした。⁽⁶⁾ 少年使節引見に侍立した多くの貴族の中に、第三代チンチョン伯爵の姿を想像するのは不当ではないであらう。

キナがヨーロッパに渡来する前の世紀、一六世紀は、ヴェサリウスのように、近世ヨーロッパ医学が新しい潮流を生んだ時代であつた。パラケルススもアンブロワーズ・パレも一六世紀の人である。次の一七世紀は、生理学の時代と呼ばれる。ハーヴェイの血液循環の業績がガレノスを超えたのも、一七世紀であつた。

スペインの哲学者オルテガは、キナが輸入されたとされる時期の一六三〇年ごろを、ヨーロッパ史の上で中世が克服され近代が発した時点とした。⁽²³⁾ 小田垣雅也は、一六三三年に行われたガリレオ・ガリレイの異端審問を、「根本的には人間の思考の方向が逆転するに当たつての摩擦なのである」とのべた。⁽¹⁶⁾ 一六二〇年には、清教徒の北アメリカへの植民がはじまっている。いずれも、カトリック諸国とプロテスタント諸国がたたかつた三十年戦争（一六一八—一六四八年）の最中であつた。医学だけでなく、ヨーロッパ全体が新しい潮流に乗って動き出した時期に、キナがヨーロッパに輸入された。

ここで、オルテガの言葉にかかわらず、近世スペインが、宗教改革もルネサンスも経過しない、中世を克服することの出来なかった社会であることを指摘したい。スペインでは、一九世紀初頭まで異端審問が続いた。他国が産業革命のさかりにあるとき、スペインは中世を引きずっていたのである。新しい医学の時期にあり、ヴェサリウスの影響があつても、当時のスペインの状況からすると、ガレノスの学説が一度に力を失うことはなかったであろう。そうした中で、キナの効果は新鮮な驚きを生じ、ガレノスを越える一つの契機となつたのではないかと思われる。

七、その後のキナ

いくつかの事項を断片的にするす。

キナ樹皮は、新大陸からヨーロッパへ輸入されて多額の収益をあげた。⁽²⁴⁾ 収奪は新大陸植民地の富を枯渇させ、スペイン新大陸植民地の一七世紀は「停滞の世紀」と呼ばれる。⁽¹⁰⁾ キナは、新大陸からの最後の輝きであつたかも知れない。キナは輸入されただけでなく栽培の努力がなされ、インドネシアが重要な産地となつた。⁽⁷⁾

キナは中国へも知られ、『本草綱目拾遺』に金鷄勒として掲載された。⁽²⁵⁾

日本では、シーボルトが使用した薬剤の中、島津斉彬の病床で使用された中にも、キナがある。⁽²⁶⁾

一八二〇年、ペルティエ (Pelletier, J.) とカヴァントウ (Caventou, J. B.) は、キナ樹皮からキニーネとシンコニン⁽²⁷⁾を分離した。

これらの事項はキナ伝説の枠を超え、薬史学の領域に属すると思われるので詳しいことは省略する。

謝 辞

この研究の文献収集に種々ご援助をいただいた、福井県立大学情報センター 伊井敦子司書、福井県立病院図書室 前田範子

司書、北里大学白金図書館、日本大学薬学部図書館、中京女子大学図書館、東海大学付属図書館伊勢原分館、慶応大学北里記念図書館、新潟大学付属図書館、東京大学教養学部図書館、福井市立図書館、金沢市立泉野図書館に感謝する。

(この論文の要旨の一部は、平成八年六月第九七回日本医史学会総会において発表した)

注

注1・ここで医学、薬学以外の一般書を引用したのは、アナ・デ・オソリーオを主人公とした点で、後にのべるようにキナ伝説のやや古い形を示しているからである。

注2・cinchona は、スペインでは chinchona、cincona の両様に綴られる。

注3・著者の Pedro Lain Entralgo (ペドロ・ライン・エントラルゴ) (一九〇八一—) は高名な医史学者であると共に、二〇世紀後半のスペイン思想界を代表するといわれる碩学。マドリッド大学の学長も務めた。

注4・副王制は、新大陸で始まったのではなく、たとえばスペインの支配下にあったナポリの、ナポリ副王という職名もすであつた。また副王職の意味が同じかどうか不明だが、スペイン国内の場合もナバラ副王という名称が文献に見られる。

注5・Condega は、現在は Condesa と綴る。

注6・ハギスとゲラの論文は、キナの植物学的、薬学的考察を含むが、この点の議論は省略した。

参考文献

- (1) Haggis, A. W.: Fundamental errors in the early history of cinchona, Bull. Hist. Med., 10: 417-459, 568-592, 1941
- (2) 泉 彪之助「キナ伝説の里、チンチョンとチンチョン伯爵夫人」、『日本医史学雑誌』四二巻四号、一九九六年
- (3) 『ブルーガイド・ワールド スペイン』八三頁、実業之日本社、一九九〇(平成二年)
- (4) 石坂哲夫『やさしくすりの歴史』五四頁、南山堂、一九九四(平成六年)
- (5) チャールズ・ハーバート・ラウオール著、清水藤太郎・難波恒雄訳『世界薬学史』一三四頁、科学書院、一九八一(昭和五六年)
- (6) José Talavera Sotoca: Chinchón, Historia, Arte, Gastronomía, Fiestas, 51p. Anzos, S. A., Madrid, 1990
- (7) テイラー著、難波恒雄、難波洋子訳『世界を変えた薬用植物』創元社、一九七二(昭和四七年)

- (8) Pedro Lain Entralgo : *Historia de la Medicina (医学の歴史)* . 364p, Ediciones Cientificas y Técnicas, S. A., Barcelona, 1994
- (9) Francisco Guerra : *The introduction of cinchona in the treatment of malaria*, *J. Trop. Med. Hyg.*, 80(6) : 112-118, 135-140, 1977
- (10) 国本伊代 『概説ラテンアメリカ史』、新評論、一九九四(平成六年)
- (11) 飯塚一郎 『大航海時代へのイベリア』、中公新書、一九八一(昭和五六年)
- (12) 寺田和夫 『インカの反乱』、思索社、一九九二(平成四年)
- (13) 江村洋 『カール五世、中世ヨーロッパ最後の栄光』、東京書籍、一九九二(平成四年)
- (14) 林屋永吉ほか 『スペイン黄金時代』、日本放送出版協会、一九九二(平成四年)
- (15) 中川浪子 『聖イグナチオ・デ・ロヨラ』、中央出版社、一九九三(平成五年)
- (16) 小田垣雅也 『キリスト教の歴史』、講談社学術文庫、一九九五(平成七年)
- (17) Sebastiano Bado' 本文参照(一)より引用
- (18) Jarcho, Saul : *The hunt for a manuscript on cinchona*, *Perspectives in Biol. & Med.*, 31 : 437-439, 1988
- (19) Markham, Clements R. : *A Memoir of the Lady Ana de Osorio, Countess of Chinchon*, London, 1874. (一)より引用
- (20) Seville, Arch. Gen. de Ind., 70-2-6 Lima 45. (一)より引用
- (21) 小川鼎三 『医学の歴史』、中央公論社、一九七四(昭和四九年)
- (22) 松田毅一 『史譚天正遣欧使節』、講談社、一九七七(昭和五二年)
- (23) 色摩力男 『オルテガ』四二頁、中公新書、一九八八(昭和六三年)
- (24) Palmero, J. R. & Vega, A. R. : *Spanish agriculture and malaria in the 18 th century*, *Hist. Phil. Life Sci.*, 10 : 343-362, 1988
- (25) 上海技術出版社・小学館 『中葉大辞典、第一卷』五二八頁、小学館、一九九〇(平成二年)
- (26) 泉 彪之助 『坪井芳洲筆島津斉彬容体書について』、『日本医史学雑誌』三九卷二号、一九九三(平成五年)
- (27) 宗田一 『近代薬物発達史』五五頁、薬事新報社、一九七四(昭和四九年)

(老人保健施設 陽翠の里)

Fables and Facts on Cinchona ; the Countess of Chinchon or the Jesuits

by Hyonosuke IZUMI

1. In a famous legend about the introduction of cinchona bark into Europe, the Countess of Chinchon, a Vicereine of Peru, played an important role. The background of the legend and the process of its formation and denial have been studied.
2. According to A. W. Haggis, the legend was originally started by Antonio Bado, a Genoese physician in the 17th century.
3. But as no description of the illness of the Countess has been found in the official diary of the Viceroy, the legend is not supported by historical records.
4. Along with the Countess of Chinchon, the Jesuits are named in the legend as having participated in the introduction of the bark into Europe. Juan Cardinal de Lugo was one of the main figures in this process.
5. The effect of cinchona on febrile diseases provoked antagonism among physicians of the Galenic school.